

釜石の歴史もやま話

3

釜石の鉄学編 (2)

問い合わせ
市世界遺産課 ☎22-8846

近代化以前の製鉄 ②

応仁元（1467）年に始まった応仁・文明の乱以来、戦国時代となっていた日本では、天文12（1543）年に鉄砲が伝来（一説に1542年）、天文18（1549）年にはキリスト教が伝来し、ヨーロッパ文化（いわゆる南蛮文化）が流入し始め、ヨーロッパの製鉄技術も入ってきました。

あわせて、戦国時代には刀の需要が急速に増え、さらに江戸時代には城下町や大都市の形成、新田開発に伴って、工具や農具などに必要な鉄の需要が高まりました。それに伴い、製鉄炉の大型化、炉の地下構造の充実、鉄の量産化が進みました。また、輸送・流通機能も改善され、鉄生産地は中国山地に集約されていきました。輸送・流通機能の改善は、砂鉄や木炭用の森林資源を求めて移動を繰り返す「野たたら」から「高殿」と呼ばれる建物の中に炉を固定した「永代たたら」へと変化させ、さらなる施設全体の拡大やそれに伴う増産に繋がりました。

域にその機能を移転しました。しかし、寛文4（1664）年に八戸藩が創設したため、その機能を失い、その後、下閉伊地域で製鉄を行いました。当初は仙台藩の商人・山師により経営されましたが18世紀後半になると在地の鉄山師が商人の出資で行う形に変化しました。江戸時代を通して仙台藩、盛岡藩、八戸藩による製鉄は現在の岩手県域で行われ、中国山地に次ぐ生産量を誇っていました。



たたら模型（鉄の歴史館蔵）

中央に直方体の炉があり、両脇には天秤フィゴが設置されています。中国地方で発明され伝播しましたが、東北地方では古来からの箱フィゴを改良・大型化し、使っていました。

釜石の近世の製鉄

釜石では、市の西部に広がる県内最大の栗橋花崗岩体（白亜紀）から産出する砂鉄やいわゆる「餅鉄」と呼ばれる鉄分を多く含む円礫が多く散布すること、木炭を得るための森林資源が豊富にあったことを背景に、盛んに製鉄が行われていました。

栗林の製鉄業

栗林における鉄山の経営は寛文3（1663）年から正徳2（1712）年までの49年間、桐善兵衛（吉里吉里善兵衛こと前川善兵衛と言われている）の出資で、栗林鉄山や剣観音下にある上鉄山、大槌鉄山で行われていました。場所は不明ですが、この地域は花崗岩帯ではないので、鉄鉱石（磁鉄鉱）を採取していた可能性が高いです。また、栗林村沢田では鍛冶が盛んで、釣針や針金を生産し宮古に送っていました。



槍（銘 奥州南部神清照作）



脇差（銘 奥羽南部栗林住神清照）



たたら遺跡地図

- ※1 鍛冶屋 鉄から鉄製品を作る
- ※2 焔屋 砂鉄や鉄鉱石から鉄を作る

確認されています。なお、栗林の刀工神清照の脇差および槍は市指定文化財となっています。

和山七ヶ山

和山は花崗岩帯となっているため豊富な砂鉄が採集できたようで、正保年間（1644-1647）から製鉄が行われていたようです。かつて、大槌代官所から小鎚として種戸坂を越えて、和山を通り、界木峠を越え遠野に向かう道が大槌街道（和山街道）としてこの地域の主要な道でした。輸送・流通に適した場所であったと考えられます。

